不破ウィーク

「元祖　まなぼーや」

令和７年度よりはじまった主体的に行動する時間「不破ウィーク」。
その中の一つの企画が「元祖　まなぼーや」。
国家百年の計である教育のために、地元の先生を地元で育てる。
先生を目指している皆さん。不破高校はどうですか？

「元祖　まなぼーや」について

元祖　まなぼーやが生まれた理由

高校生から生まれた理由

教員の質的向上について、

「実際の現場で学びたい！」

大人から生まれた理由

教員育成支援

「我が町『垂井』の教員を増やしたい」

元祖　まなぼーや　の実際

二人三脚型教育実習

- 実際の授業に入って、子供の支援をする。
- 教育現場で実際に働く先生から学びの支援方法を学ぶ。
- 担当してもらっている高校教員に、教育実習中に指導してもらい生きた指導方法を学ぶ。
- 実習を通して、教員のやりがいに触れる。

2025年教育実習実施校

宮代小学校
【6月18日】

不破中学校
【7月9日】

合原小学校
【9月10日】

府中小学校
【10月8日】

表佐小学校
【11月12日】

関ヶ原小学校
【12月10日】

実習参加者

学年	名前	希望校種
３年	Ｊ　さん	特別支援 小学校
３年	Ｗ　さん	小学校
１年	Ｈ　さん	小学校　中学校 養護教諭
１年	Ｆ　さん	中学校　高等学校
１年	Ｓ　さん	幼稚園　小学校

2025年　活動全体の評価

○視点の変化

　当初は「子供と遊ぶ・話す」ことが中心でしたが、回を重ねるごとに「先生の発問の工夫」「クラスの雰囲気作り」「個別の支援と全体指導のバランス」など、教育技術の視点で現場を見るようになりました。

○生徒間の相互作用

　Jさんの記録には「Wさんの動きを見て参考にした」という記述があり、実習生同士がお互いの良い点を学び合う相乗効果が生まれていました。

　Sさんは、「Wさんのように積極的に支援できるようになりたい」という発言がありました。異年齢による学びの伝達が生まれていました。

○キャリア意識の形成

　「教員にもっとなりたいと思えた」「大学入試に活かせる」といった記述があり、進路選択を決定する上での重要な指針となりました。

成長の記録　Jさんの場合

○寄り添い続けることの大切さ

6月18日の最初の実習では、子供の反応の薄さに心が折れかけましたが、そこから非常に重要な教訓を得ています。授業についていけない児童に関わろうとしましたが、反応が薄いため「嫌われているかも」と不安になり、一度関わるのを諦めてしまいました。しかし、完全に放り出すのではなく、最後までそばにいたことで、最後に児童が話してくれました。この経験から、「少しずつでも寄り添い続ければ心を開いてくれる」という教育の本質を体感することができました。

○生徒と共に学ぶという視点の習得

7月9日の中学校での部活動指導（吹奏楽部）では、自身の専門外の分野に対する向き合い方を学びました。吹奏楽の知識がないため、「積極的にサポートすることから逃げた」と正直に振り返っています。しかし、担当の先生の姿や友人のサポートを通じて、「先生になれば未経験の部活顧問になることもある」という現実を知り、「知識がなくても生徒と一緒に学び、教えてもらう」という「学びの共同体」としての教師像を発見しました。できないことを嘆くのではなく、知識の幅を広げようという意欲に繋げています。

○仲間と共に学ぶという視点

９月～１２月の実習では、「褒める言葉のレパートリーが少ない」「同じ言葉の繰り返しになってしまう」という、非常に具体的な指導技術の不足を痛感しています。そこで一緒に参加した「Ｗさん」の動きや言葉がけを参考にしました。「Ｗさんを参考にして褒め言葉を増やしたい」という記述は、他者の良い点を素直に取り入れようとする柔軟な学習姿勢を表しています。教員になった際も必要となる同僚との学びの原点に気づけていると言えます。

○学び続ける教員として

Ｊさんの成長における最大の特徴は、「自分の弱さを認め、他者（子供・先生・仲間）から素直に学ぶ力」です。反応が薄い子供からは「待つことの大切さ」を、未経験の部活からは「共に学ぶ姿勢」を、言葉が出てこない経験からは「語彙の重要性」を学びました。特に「特別支援学校教諭を目指す」という記述にあるように、個別の子供に寄り添う難しさと喜びを深く体験しており、失敗を繰り返しながらも決して投げ出さず、着実に「教員」としての歩みを進めています。

成長の記録　Wさんの場合

○教員という立場の認識

「お姉さん」から「先生」へ最初の実習から「子供との距離感」に悩み続けましたが、回を追うごとにその悩みの質が高まっています。6月では「先生というよりお姉さんみたいな立場になってしまった」と、優しさと指導力のバランスに苦悩しました。「ダメなことはダメと言う」メリハリの必要性を痛感し、担当して頂いた先生に理想像を見つけることで、目指すべき姿を具体化しました。9月には目標に「小学校教員になりたいと心に決めて初めてのまなぼーや」と記しており、進路に対する迷いが消えています。この決断が、その後の実習の質を高めて行きました。

○「手助け」から「自立支援」へ

6月の実習では、「何でも私が手伝ってしまった」「すぐ話しかけてしまい見守ることが全然できていなかった」という反省を繰り返し記録しています。しかし、9月には「危ないことをしていた時、先生として注意することができた」と、ただ見守るだけでなく必要な介入ができるようになり、行動変容が見られます。7月の 中学校での部活動指導（吹奏楽）では、知識がない中での指導や、小学生とは違う「距離感（見守る姿勢）」の重要性を学びました。「教えない指導」の難しさを知ったことは大きな収穫です。

○教育観の深化

12月の最後の実習の記録からは、彼女が教員としての本質的な資質を掴んだことが見えてきます。言うことを聞かない児童への対応で悩みましたが、担当して頂いた先生が「大人と子供ではなく、人間として向き合っている姿」を見て、テクニック以上の信頼関係の重要性を学びました。その中で、「1分だけ聞いて」という声かけなど、先生が子供の集中をコントロールする技術を具体的に分析できています。「一言付け加えるだけで視線を集める」という教育方法に着眼点が向き、教育について学ぶ視点を得ていると言えます。

○「まなぼーや」を残していきたいという気持ち

12月の記録からは、「4月にまなぼーやを立ち上げて下級生も入ってくれて」という記述があり、彼女はこのプロジェクトのリーダー的役割を意識していたことがわかります。また、自らの成長だけでなく、後輩や周囲への感謝、組織運営への視点も持っており、「教員になるために必要な資質（観察力・修正力・人間性）」を、この実習を通じて学んだと言えます。「大学受験にも活かすことができた」という言葉通り、この経験は彼女にとって、理想の教師像への確かな一歩となったと考えられます。そして、「まなぼーや」という貴重な機会を残したいという思いが残されました。

進路実績

元祖　まなぼーやに参加していた３年生は、
無事に教育学部へ進学しました。

進学した先輩は、はじめての大学での教育実習の際に、担当してもらった小学校の先生に、「こんなに能力が高い実習生に出会ったのは初めて」と言われたそうです。
やったね！

さいごに

先生になりたい皆さん！
不破高校も進路選択の一つにしてみてください。